

要旨

高齢者の排泄は生活の質や尊厳に直結する重要な要素であり、特に寝たきりの高齢者では、排便の問題が生活に大きな支障をきたすことがある。2025年、寝たきりの高齢者の数が増加することが予想される中、介護医療院でも利用者の生活を支えるためのケアが求められている。本報告では、脳梗塞後の重度片麻痺をもつ高齢者3名を対象に、離床が排便コントロールに与える影響を分析した。対象者はCOVID-19の影響で長期間臥床を余儀なくされ、その後の離床によって自然排便日数や便性状に改善が見られた。特に車椅子での座位は腸蠕動運動を促進し、臥位での排便を助けたと考えられた。離床が寝たきりの高齢者の排便コントロールに寄与する可能性が示唆されたが、今回は3事例の実践結果であるため、さらなる対象者数の増加と離床支援方法の検討が必要である。今後の研究が介護医療院における排泄支援の向上に寄与することが期待される。